

東日本・家族応援プロジェクト 2018 in 多賀城を開催しました

人間科学研究科教授 村本邦子

今年も、多賀城市立図書館の共催、おおぞら保育園の協力を得て、2017年10月5日(金)～10月12日(日)で家族漫画展、10月5日(金)には支援者交流会を開催しました。10月6日(土)午前は、鶴野祐介先生(立命館大学)のコーディネートのもと、多賀城民話の会、おおぞら保育園のみなさんとのコラボによって、「民話と絵本と遊びのワークショップ」が開催されました。早くから来て待っていた親子や、たまたま通りがかった子どもたちなど、入れ替わり立ち替わり40名ほどの方が参加してくれました。

多賀城民話の会のみなさんは、子どもたちが喜びそうなおもしろい民話をたくさん準備してくれており、お父さんやお母さんたちをも魅きつけていました。おおぞら保育園のお母さんやお祖母さんによる絵本読み聞かせ、先生方による手遊びや大型紙芝居、ウクレレの音も耳に優しく、楽しいひとときでした。鶴野先生による伝承遊びでは、お手玉やゴム飛びを楽しみました。少し大きな子が高いゴム飛びに挑戦し、小さいきょうだいを抱えて飛ばせてやるなどほほえましい場面が今年も繰り広げられました。「最初できなかったのができるようになって嬉しかった。(10歳以下男性)」「1歳の息子も楽しそうにしていた。(20代女性)」「続けて欲しいです。(30代女性)」「私のような老人でも参加して、生きる力をもらいました。(70代女性)」など、さまざまな世代から反響を頂きました。

今年の漫画トークも、1階のオープンスペースで行われました。毎年楽しみに遠方から来て下さる人から、通りがかりにちょっと足を止めて聞いている人まで参加の仕方はいろいろですが、漫画パネルとともに届くものがあったのではないかと思います。「いろいろなことに巻き込まれながら、それでも人は生きていける。それが元気の元でしょうか???何かよくわからないけど、楽しい時間でした。(50代女性、2回目)」「団先生のお話と冊子は毎回何度読み返しても心に染み入るものがあり、私たちの日常生活が(家族を思いやり、行動に移すこと)いつも大切なんだ!ということであらためて強く思った。ありがとうございました。(60代女性、4回以上参加)」などの反応を頂きました。

プログラム終了後は、多賀城市立文化センターに移動し、上山真知子先生のご講義を頂きました。人は歴史の中に位置づけられることを通して存在の基盤を確かにするのであり、古い記録がどれほどそれを支えるのかあらためて考えました。石巻では本間英一さんを訪れ、震災遺構となった土蔵や展示資料を見ながらお話を聞かせて頂きました。歴史学者や史料レスキューを社会資源に、古い歴史を持つ地域の家が中心になって、コミュニティが震災を乗り越え復興に寄与している様子に感銘を受けました。また、元いしのまき寺子屋事務局長の太田美智子さんのお話から、男性中心の避難所運営による問題をたくさん聞いてきたなかで、女性を中心に安全な避難所運営やボランティア受け入れの判断を行っていたところがあったことを知って驚くとともに、それも女性が力を持つ浜文化の反映と聞き、やはり日常の在り方が非常時にそのまま映し出されるのだとあらためて思ったものでした。

お世話になった皆様に感謝いたします。

多賀城プロジェクト日誌2018

人間科学研究科訪問教授 団士郎

新しくなって三年目の多賀城市立図書館での漫画展。今年の会場は二階奥の、オープンスペース。館内で奥まった場所なので分りにくさが難点だが、三階の部屋よりもいい。会場案内が適切に出来たら、見やすい会場だ。今週から始まって、月末までの長期間開催。

会場横に配置された長椅子が、少しの時間浸っていたい人や、小冊子その場で読む人にとって、良い場所になっていた。短時間、私もそこに座って様子を見ていたのだが、その間に三人の方と言葉を交わすことになった。

二人連れは新しい多賀城図書館を見に来たという隣の市に住む女性達。全くの事前情報なく漫画展を見て、自分の子ども世代（所帯持ち）に見て欲しいと思うと話し、ある展示作品をさして感想を語る。

その時、長椅子で熱心に冊子を読んでいた女性がその会話を聞いていて「作者の方ですか？」と話しかけてきた。

事情で仕事を退職し、そんなタイミングでここでマンガ冊子を手にした。いろいろ思うことがあると語り、前にも転職歴があって…と自分の事情を語り始めた。他にも人がいる空間だから自制はかかっているだろうが、空間と物語が作り出す雰囲気の中での会話になった。

午後のプログラム、講演「木陰の物語の物語」、今年のテーマは「ものごとは扱い方次第」。問題が起きない社会や家族はあり得ないし、片付かない問題ばかりでもない。だから物事は扱い方次第、扱う人の癖が大いに関わってくるという話からスタート。

「駅」という母娘の話を提示した後、扱い方の問題や、そもそも、そんな事態にもってってしまう人の持つ弱点を、事例を登場させながら話す。昨年に続いて、図書閲覧スペースを区切ったの会場設定。多少音量を無意識に制御してしまうが、話しやすい空間になる。

終了後は会場を移って、明日訪問する歴史的古文書レスキューの場についての解説を、上山さんから伺った。

翌日一日かけてのフィールドワークも興味深く、最後にお目にかかった方の話も、渦中に避難所にいた方ではあるが、いわゆる被害者語りではない切り取り方に惹かれた。

現地でお世話して下さる方達との交流もたっぷり時間を確保して、盛りだくさんな三日間で、社会人院生二人の能動性も大いに発揮された充実の時間だった。事前準備や現場に立ったときの入り込み方が、結果を左右することをあらためて実感した三日間だった。



「東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城 2018」に参加して
鵜野 祐介（立命館大学文学部）

筆者が本プロジェクトに参加し、初めて多賀城を訪れたのが2013年10月のこと。以後毎年この時期に足を運んできた。6年目となる今回も、心に残る出会いと発見がいくつもあった。

仙台市歴史民俗資料館訪問

10月5日（金）午後、仙台駅から一駅つつじがおかの榴岡駅に降り、榴ヶ岡公園内にある仙台市歴史民俗資料館を訪ねた。今年3月に出版された是澤博昭『軍国少年・少女の誕生とメディア』（世織書房）を読んで、1932年9月に満洲国を訪問した「日本学童使節」の東北代表・松岡達少年（当時小6）に関する資料が多数この資料館にあることを知り、この機会にぜひ見せていただきたいと思ったためである。応対して下さった学芸員の佐藤雅也さんは、偶然にも立命館大学文学部卒業とのことで、懇切丁寧にこちらの求めに応じて下さった。

今から 80 数年前、世界的な経済恐慌や凶作による困窮の中、大陸への進出によって事態の打開を図ろうと当時の日本政府と軍部が一体となって満洲民族に無理やり建国させたのが満洲国であり、その存在を日本国民に認知・支持させることを目的として満洲国に派遣されたのが全国各地から選抜された 15 名の「日本学童使節」である。その東北代表として満洲を訪れ、「愛国少年」の鑑とも称せられた松岡少年は、「私の身体は私だけのものではありませんませぬ皇国のものであります」と語り、「(戦死者を祀る) 忠霊塔に納まるつもり」と誓った通り、旧制仙台一中、海軍兵学校を卒業後、アジア太平洋戦争に従軍し、1943 年ラバウル会戦で散華する。

当時の様子を知る手がかりとなる貴重な写真や地図や文献を書庫から持ち出してきたのだが、中でも興味深かったのは、1933 年に創刊号が発行され、1943 年の第 11 号まで年 1 回刊行された『仙台愛国少年』という雑誌で、創刊号、3 号、4 号、5 号、7 号、8 号が残されていたが、どの号にも小学生の作文が多数収められていた。ここには「愛国少年・少女」たちの模範的な紋切り型の言辞が並んでいるが、そんな中に時折、彼らの本音がポロッとこぼれ出ているのが目を引いた。

但し、残念なことに同資料館にこの雑誌の全号が揃っているわけではなく、県立図書館など他の施設も同様で欠番があるのではとのことだった。85 年前の仙台の子どもたちがどんな将来の夢を描き、どんな毎日を送っていたのかを知る手がかりとなるこの一次資料はたいへん貴重なものであり、骨の折れる仕事と思うが古本屋などを渉猟してでもいつか全号を揃えていただけたらと願う。

また、この雑誌がこの資料館に保管されていることも意義深い。資料館の建物は明治 7 年に建立された第二師団第四連隊本部の兵舎を改装したものであり、昭和初期にも兵舎として用いられていた。館内の一角には当時の兵士の寝室が復元され展示されている。つまりこの建物は、松岡少年の壮行式をはじめ幾多の凱旋パレードや英霊の慰霊祭を目撃している「生き証人」なのである。

前口上を長々と綴ってきたのは他にもない、歴史の記憶装置としての、文献資料や建造物をはじめとする物的資料の重要性ということが、今回の 2 泊 3 日の旅全体を通して最も強く印象づけられたことだったからである。文献資料と物的（非文献）資料、この両者に歌や物語といった口頭伝承の無形文化財資料が加わることで、歴史研究は奥行きを持つものとなる。そしてこれら三種類の資料の分析結果を総合的に考証することは、東日本大震災をはじめとする自然災害の歴史研究においても肝要なのではあるまいか。

変わりゆく町並み

5 日午後 5 時半に JR 多賀城駅に着き、隣接する市立図書館に向かう。薄暮の中、ライトアップされたスタイリッシュな建物の図書館を仰ぐ。館内には若者を中心に多くの利用者の姿が見られた。図書館だけでなく、駅周辺の建物も駅前広場も復旧・復興工事を一通り完了し、この町にはじめて訪れた 6 年前と比べるとすっかり様変わりしている。白を基

調とした清潔感あふれる町のイメージは、仙台のベッドタウンとして若い親子連れ世帯にとって快適な町づくりを進めていく上で大切な要件となるものと思われ、そのこと自体に難癖つけるつもりはない。ただ、どこかよそ行きの感じがする。老いも若きも一緒にくつろげる場所、たとえ薄汚れていて雑然としてはいても人の温もりが感じられる場所、そんな憩いの空間は市街地復興整備計画の中に位置づけられていなかったのか、とつい余計なことを考えてしまう。

この日午後6時から開かれた交流会の中で、前の市立図書館館長だった丸山さんが確か「多賀城には商店街も飲み屋街もない」とおっしゃっていたと記憶するが、ショッピングモールとニュータウン（住宅街）だけでは町のうるおいは生まれえないはずだ。多様な世代や出自や居住目的を持つ市民が集い憩えるアゴラ（場）を今後どのようにして作っていくか、市民の皆さんの動きを見守っていきたい。

ワークショップの振り返り

6日（土）午前10時から11時30分まで「民話と絵本と遊びのワークショップ」を行い、進行役を務めた。前の図書館で行なった2015年の時にご出演いただいた「多賀城民話の会」に、今回再び引き受けていただいた。

当日は5人の方が語り手としてお見えになり、第1部の「民話語り」の中でそれぞれ個性豊かに語って下さった。地元の方がたに演じていただくことは、本プロジェクトの「支援者支援」というコンセプトにも合致しており、実現できてよかったと思う。強いて課題点を挙げるなら、幼い子どもには内容が理解しづらいと思われるお話もあったこと、最初の語り手の方が、足が悪いので椅子を使うことを希望され、その後の方がたもずっと使われたために、目の位置が子どもよりも高くなり、その結果子どもたちとの間に距離ができてしまったこと（昨年の加藤恵子さんは床に坐っておられたため視線が低く、子どもとの距離が近かった）などがある。

第2部の「おおぞら保育園」の保護者の方による絵本読み語りは、2人のお母さんと1人のおばあちゃんがそれぞれ普段使っておられる本を持参してきて読まれ、その後、保育士さんの1人が手作り紙芝居を使いながら詩を朗読された。お母さんやおばあちゃんの絵本読みは、普段ご家庭でやっておられる時の雰囲気がよく伝わるアットホームなひとときだった。ただ、大勢の聞き手がいることに配慮するなら、絵本は大きめのサイズにする、ピンマイクをつけるなどの工夫が必要だったかもしれない。また保育士さんが詠まれた詩は、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロの後に作られたという、東日本大震災にも共通する「対象喪失」をテーマとするもので、その詠唱からは読み手の保育士さんの熱意が伝わってきて、今回のワークショップのハイライトと言えるものとなった。

第3部の「伝承遊び」のコーナーは、安全面も考慮してお手玉を中心に進めたが、筆者の準備不足で、みんなで歌えるお手玉唄をきちんと歌唱指導できなかった点が悔やまれる。お手玉の遊び方ももう少しいろいろなやり方を指導すればよかった。次回は当日までに歌・

遊び方ともに仕込みをしっかりとっておきたい。あるいは「支援者支援」という観点から、第3部もおおぞら保育園の黒川園長先生に進行をお願いするという形を取った方がいいかもしれない。

ワークショップ全体を通しての反省として、黒川先生と齋藤さんと筆者との、3人の間の事前連絡が不十分だった点が指摘される。それぞれ多忙であること、筆者が遠方であることは承知の上で、最低限の調整が必要だろう。この反省をしっかりと来年に生かしたい。

「多賀城民話の会」編纂の証言録『忘れまい 大震災』

ワークショップの後、民話の会の方がたとの昼食中、民話の会が編集した証言録『忘れまい 大震災』（2012年8月発行）を齋藤さんに見せていただいた（お借りして持ち帰り、コピーさせていただいた）。民話の会による震災証言録としては、山元町、名取市閑上、福島県双葉町で手掛けられたものを筆者も持っているが、今回この証言録を拝読し、多賀城でも民話の会の皆さんによってこのような記録がまとめられたことに感服した。

ここには震災を体験した民話の会の方がたによる22のパーソナルで小さな物語が、「津波浸水地域図」や、多賀城に伝承された津波にまつわる2つの伝説—「こさじ伝説（猩猩の報恩）」、「色の御前様」—とともに収録されている。そして会では500部が印刷されたこの冊子を、市内外の図書館、市内の小中学校・高校、保育所・幼稚園・児童館、地区公民館・社会福祉協議会などに無償配布した。「編集後記」にはこう綴られている。

「まさか！」が現実となった3月11日、大蛇と化した黒い濁流と闇夜を貫く紅蓮の火柱を見て、こさじ物語や浮八幡、泥八幡の伝説が、時空を越え語り継いできた過去の人々からの警鐘だったと実感した。その伝言に耳を傾けることなく、民話の会は、何を語り継ごうとしていたのか、悔恨の念に駆られてやまない。

あれから、二度目の盆を迎えようとしている。巷では、すでに大震災が過去のものになりつつある。しかし、ある地震学者は「大地動乱の時代」が始まったと言う。巨大地震はまだ終わっていないのである。ならば、民話の会は今こそ、その警鐘を鳴らした過去の人々と連帯し、未来の人々が同じ辛酸を舐めぬよう、震災の記憶を語り継ごうと決めた。

全員が被災者、しかも平均年齢が70歳を超える会にとって、編集作業は困難を極めた。第一回原稿読み合わせが今年の二月。原稿を校正するたび、当時の惨状が思い起され文字が涙で滲んだ。あれから約半年、どうにかこうにか発行にこぎつけた（後略）。

この貴重な証言録が様々な場所で、また様々な形で活用されていくことが望まれる。例えば来年のプロジェクトでも、これを読んでいただいたり紙芝居にして演じていただいたりする、といったことが考えられるだろう。ぜひ今後に繋いでいきたいものだ。資料をご提供下さった齋藤さんに改めてお礼を申し上げたい。

上山先生のお話～本間さんの土蔵訪問

6日の夕方、昨年が続いて、臨床心理学者の上山真知子先生（前山形大学教授）のお話を伺った。今回は「ふるさとの歴史を救う意味―心理社会的支援としての歴史資料保全の可能性」というテーマで、翌日訪問する石巻市門脇地区の本間英一さん宅の土蔵とそこに保管されていた古文書や非文献資料を例にとって、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（宮城資料ネット）による保全活動（レスキュー）の意義と、このプロジェクトに心理学者が関わっていくことの意味について話された。歴史学者としてこのプロジェクトに参加しておられるパートナーのモリスさんとの、時に辛辣かつユーモラスなやりとりを交えたお話は、翌日の事前学習として最適のものだった。

7日（日）朝、列車で約1時間、石巻駅に到着し、タクシーに分乗して門脇地区に建つ土蔵の所有者・本間英一さんのお宅を訪れた。「近世から近代にかけて廻船業、金融業、醸造業を営み、石巻有数の資産家だった武山家の流れを汲む本間家は、門脇地区の日和山の麓にあり、2棟の住宅、2棟の土蔵、醸造蔵だった大きな倉庫と板蔵が並ぶ広大な屋敷地を構えていました。（中略）石巻は北上川河口に位置し、ここから仙台藩の御穀米（藩米）が江戸に運ばれていました。一時、江戸の消費米の三割は御穀米といわれたほどで、武山家のように廻船業で財を成した資産家が生まれました」（ミツカン水の文化センター機関誌『水の文化』48号より）。

この土蔵は今回の津波によって1階天井付近まで浸水したものの流失や焼失を免れ、2階に置いてあった古文書や書籍、道具類とともに奇跡的に無事だった。本間さんはこの土蔵を、石巻の「震災メモリアル」として保存継承していくことを決め、宮城資料ネットのサポートと全国から寄せられた募金によって修復し、土蔵内部の展示資料パネルなどを作成して2014年から一般公開をスタートさせたという。

土蔵の中に入ると、ひんやりとした空気と独特の匂いに包まれた。江戸時代の出納帳、千石船のミニチュア、調度品、昭和初期の世界地図や旅行カバンなど、たくさんの珍しい品々が陳列されている。こうした資料を博物館や資料館ではなく実際に何十年も使われてきた土蔵の中で見学できることは、とても貴重である。またおそらく、震災で何もかも失くしてしまったと絶望感に打ちひしがれた地域住民にとって、この土蔵とその収蔵品は、江戸時代から今日まで連綿と続いてきた郷土の歴史の「物言わぬ生き証人（silent witness）」として、大きな自信と希望を与えてくれるものとなっているに相違ない。震災直後から今日までの歩みを穏やかな表情で淡々と語られる本間さんの語り口からも、そうした自信と希望が読み取れた。「震災メモリアル」が引き出すレジリエンスの好例と言えよう。

太田さんのお話と報告書『まよわないように』

7日の午後、今回の多賀城プロジェクトの最後に、元いしのまき寺子屋事務局長の太田

美智子さんにお話を伺った。筆者が太田さんに初めてお目にかかったのは 2013 年 3 月だったと記憶する。以来年 1、2 回、当時山下町にあったいしのまき寺子屋の事務所兼プレイルームを訪ねて、太田さんや寺子屋を主宰しておられた高橋信行さんに、活動や子どもたちの様子を伺ってきた。今回は、昨（2017）年 9 月末で寺子屋の活動を終了され、震災直後からの 6 年半の「小さな物語」を『まよわないように 3.11 石高トレ室避難所物語 1』という報告書にまとめて今年 3 月に発行された太田さんに、これまで聞けなかった震災直後の「避難所物語」を中心にお話を伺った。

一番印象に残ったのは、子どもたちを中心に据えることで避難所の生活がうるおいと活気のあるものになるという、女性ならではの発想がもたらした効果だった。この時、子どもたちを決して保護されるべき弱者と見なすのではなく、主体的・能動的に行動すべき生活者で見なしたことによって、結果的に子どもたちの自立心と自信を育てていくことにつながったと太田さんは話された。

そして、旅から帰って読ませていただいた報告書には、避難所の開設から寺子屋の立ち上げ、そしてその活動の終了に至る 6 年半の日々が、時間軸に沿って丁寧に、なおかつ感情過多におちいらず淡々と記されていた。この記録から学び取れることはたくさんあるだろう。前述の多賀城民話の会『忘れまい 大震災』と同様、大手出版社から全国的な販路によって流通する類のものではないけれど、こうした報告書や証言録に全国津々浦々でアクセスできるようなシステムやネットワークを作っていくことが望まれる。われわれのプロジェクトもまたその一翼を担うものとなることを期したい。

未来に向けて語るということ

石戸諭（2017）『リスクと生きる、死者と生きる』（亜紀書房）によれば、広島原爆ドームが残っているのは決して偶然の産物ではなく、建築家・丹下健三の明確な意志に基づくものだという。1949 年に開催された広島市平和記念公園設計コンペにおいて、設計を依頼された敷地の外にある原爆ドームを重要なものとして位置づけた丹下案が一等を獲得したことで、原爆ドームは保存された。「戦争の記憶を想起させる」「住民の気持ちを思えば…」と撤去を求める声もある中、丹下は「原爆の恐ろしさ、残虐さ、非人間性、そうしたことを永久に忘れないために、もう二度と人類が原爆を使用しないために、このドームはシンボルとして残すべきだ」として、原爆ドームの持つ「力」を信じ、平和記念公園と一体のものとして考えたという（石戸 2017：261-264）。

「起きた出来事を記憶するために、何かを遺す。いくつかの事例から学べることは二つある。一つは場の持つ力を軽視しないこと。もう一つは歴史的な出来事を物語る何かを遺すためには、同時代の人々に向けて語るだけでは不十分であるということだ。ある出来事から教訓を得るのは、同時代の人だけではない。そこには『未来』にも向けて語る、という視点が不可欠になる」（同上 267）。

本レポートの最初の方で述べた、「文献資料」と「物的（非文献）資料」と「口頭伝承の

無形文化財資料」、これら三種類の資料が語る「物語（歴史）」の価値を、同時代の人びとのみならず、未来を生きる人びとに向けて語ることが今求められている。その時の語り手は、直接的な意味での被災者（当事者）か未災者（非当事者）かを問わない。同時代を生きている私たち全員が「歴史の当事者」として、自分の物語（歴史）を語り、相手の物語（歴史）を聞き、対話することで両者の接点を見つけ出し、そこから一緒に未来のことを考え、未来に向けて語っていくのだ。誰もが「語り手」であり「聞き手」なのである。

最後に、今回の多賀城プロジェクトでお世話になったすべての方がたへの感謝の気持ちを申し添えて本レポートを結びたい。

東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城 2018 に参加して

人間科学研究科 対人援助学領域 M1 増尾佳苗

私は災害発生直後から回復期までの医療救援を職務としている。入学前、「臨地の対人援助学」を拝読した。地域コミュニティのレジリエンスに働きかけ、被災地の人々と顔の見える関係を結び、被災と復興の証人になることをめざした立命館大学の取り組みに興味を持った。私は災害救援者として現場で活動する際、多くの方から現場の思いを伝えてほしいと言われてきた。「証人」として、直後の状況を被災地外の人々に伝えてきた。本を読み、医療者としてだけではなく、地域の人々がどのような思いを持って生き抜いてこられたのか、レジリエンスについて学びを得たいと思いプロジェクトに参加した。多賀城は私が震災3日後から活動した場所であり、思い出深い場所であった。津波で大きな被害を受け、被災された人々の悲痛な声を耳にしたが、どの方も助け合い、支え合っておられたことが印象に残る活動だった。その時の気持ちを思い浮かべながら多賀城に向かった。記憶に残る多賀城とは違い、駅も道も川も復興していた。ほっとした気持ちになった。一日目は復興ビジネスでガイドをされている方に案内をしていただいた。地域の家の壁には津波が来たことがわかる変色が所々にあった。電信柱やビルの壁には私の身長をはるかに超える津波到達地点の表示があった。砂押川のそばには「津波襲来の地」という石碑があった。ほっとしたのもつかの間、ここは津波被害が確実にあったという現実を理解した。被害が大きかった国道45号線、古びた歩道橋は私が活動した際にもたびたび目にしていた。津波襲来の折は歩道橋の上に逃げる人々でいっぱいそのまま一夜を明かした人も多かったとのことだった。その時の写真を見せていただき、どのような思いで一晩たたずんでおられたのかと胸が痛くなった。二日目は多賀城図書館で行われるプロジェクトに参加した。民話の会の方からその地に伝わる教を民話で伝えることの大切さについて教えていただいた。団先生の漫画トークでは、自分の課題の扱い方の癖を知ること、ものごとは扱い方次第であると話され、隣席の方と自分の思考の癖について話し合う機会を得た。夜は上山先生の講義を受けた。古文書レスキューをされている東北大学防災科学研究所の活動について教

えていただき、古文書レスキューはその地のアイデンティティを守る重要な支援であることが理解できた。三日目、土蔵と古文書を津波から守った本間さんに会いに行った。移動の電車の中で出会った方から震災で地域のコミュニティが変わったことや路線が山側に変更になることで海に近い町の活気がなくなった話を聞いた。安全ではあるが、寂しくもあるという言葉に共感した。訪問した本間さんの家は地域の津波避難所となっている日和山のふもとだった。自宅周辺の写真を見せていただきながら避難された時の話や被害を受けた土蔵を再建した経緯を話していただいた。地域の人々と助け合っこの地を守ってこられた様子がよくわかり、レジリエンスの高い本間さんを目の前にただただ驚いた。午後伺った東日本震災圏域創生 NPO センターの太田さんから興味深い話を聞いた。支援に来る人の中には歓迎できない人も多かったとのこと、弱者というレッテルをはられ、自分たちがなんとかしてあげるとい自己満足のために来ている人は関わりたくないと思つたと話された。二日目に会った丸山さんも「被災者は弱者じゃない」と言っておられたことを思い出した。逆に、自分の役割やポジションがわかっていてそれを踏まえて動いてくれる人はよかつたとのことだった。私の姿は被災者の皆様にどう映っていたのだろうか。反省すべきことがあるのではと思つた。そして、お話を聞かせていただいたことを心からありがたく思つた。様々な地域、立場で被害に向き合い、乗り越える過程でどの方々も「できることをやる」「最後は自分でやる、自分の力でやる」と言っておられた。個々が持つ経験知や柔軟性、日ごろからの減災意識が影響していると理解した。震災後、U ターンで多賀城の復興支援ビジネスを立ち上げた松村さん。震災直後から家にあるものでスコーンやケーキを作り、地域のママ同士のつながりでマルシェを主催したコトリカフェのオーナー夫妻。避難所の運営に奔走された前多賀城図書館館長丸山さん。東日本大震災の文化財救済事業である古文書レスキューが地域のアイデンティティを守ることや減災対策に重要な意味を持つことを教えていただいた上山先生とモリス先生。他の方々も含め、出会った方々から学んだことは私にとっては刺激的であり、救援活動を振り返るよい機会となった。未曾有の複合災害がもたらした学びは様々な職種の人間に大きな影響を与えている。看護という領域だけから見ることを懸念して、立命館大学のプロジェクトに参加したことは大変有意義だった。被災された方々のニーズを知るには、歴史や地域の文化、日ごろのコミュニティが影響している背景を理解することと学んだ。一期一会の出会いに感謝するとともに、これからも証人として学びを伝えていきたいと思う。最後に、お世話になった多賀城市と石巻の皆様、村本先生、団先生、鶴野先生、平田さんに心より感謝したい。

東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城 に参加して

人間科学研究科 対人援助学領域 M1 有馬祐美子

大震災の現場に行くという覚悟

宮城県を訪れるのは2度目である。前回は震災直前に学会が仙台で行われた時で、最終

日に抜け出して松島まで観光に行ってみた。演題発表を終えた解放感と、トンネルを潜り抜けた後に現れた美しい海岸の風景を、今でもしみじみ思い出すことができる。多賀城市は仙台から松島までの間に位置するので、当然その時も仙石線に乗っていた私は通過しただけだが、歴史好きも相まって駅周辺の景色を僅かではあるが覚えていた。

ところが今回降り立った多賀城駅は、数年前に建て替えられた高架式の近代的な建物で、駅舎の周りも美しく整備されている。北側には今回お世話になる多賀城市立図書館と、南側には震災で犠牲になられた方のモニュメントが佇んでおり、震災前後のあまりにも大きなコントラストに、言葉で説明しきれないざわめきを感じることから実習が始まった。

今回のプロジェクトに参加した理由の一つに、まだ臨床にいたあの頃、精神科支援部隊として東北に向かう話があったのだが、人員不足で通常業務が回らないことから、他のコメディカル達が向かう中、自分たちは病院に残るしかないという選択をしたことがあった。当時の自分に特に何かができなかった訳ではないかもしれないが、お役に立てないままきってしまった想いを7年引きずっていたこともあり、現地に到着した時には「一体どんな顔して行けばよいのだろう」とふと不安がよぎりだした。

だが、訪れた先々で出会った方々との交流の中、強烈な体験談の前に恰好をつけようとしても取り繕えない素の自分が出てきて、またそんな私に寄り添ってくださる優しさにもたくさん触れられた。現場を直接見るだけでなく、ここで生活しておられる人たちにお会いし、実際に起こったことを、当時どんな風に感じたのか、また月日が経って今はどう感じておられるのか、話をお聞きすること自体に大きな意義があることに気付かせていただき、次第にその場に立っている実感が持てるようになってきた。

東北人気質に出逢ってみて

以前からマスコミの報道や、身近にいる東北出身の方との関わりを通して、寡黙ながらも穏やかに家族・地域のつながりを大切にされているイメージは持っていた。そこに震災の時に支援にあたった人たちから聞いていた“我慢強い”についてはどうなのだろうとも思いながら、今回お話を聞かせていただくことのできた皆さんから得た情報で、東北人気質といわれる特質が災害を乗り越え復興していく道のりで、どんな影響を与えたのかを大変おこがましいことだが考えてみた。

震災を受けた場所の街歩きをお願いしたガイドさんが、当時の津波襲来の動画映像を見せてくださる時に一言、「ちょっと恐い動画ですけど、大丈夫ですか？」と気遣ってくださった。私ならそんな配慮は忘れて、見せてしまっているだろう。また、何名もの方から食料などの物資、救援部隊や必要な技能を持ったボランティアなどが、なかなか回ってこない避難所が大多数であったこと、その最中、多賀城では市役所の職員による避難所運営の初動の早さや、避難している人たちとの連携ができていたこと、地域住民の皆さんの機転で一日も早く店を開ける努力をされたことなど、互いに少しでも余裕のある所を譲り合い、助け合っていく、公助・自助・共助の精神が機能していた様子をあちこちでうかがった。

都会の単身者が多い地域の者からすると、日頃から自分の家族といった狭い人間関係だけでなく、コミュニティーを大切にしている土台ができていのように感じられた。適切に人間関係を築き、長く維持する能力の高さと、それを次の世代に伝えていく下地がしっかりしているからこそ、外から来た人間からは、他者に配慮をして、自らは我慢するという部分が目立ったのかもしれない。元々互いになくはならない関係と考え、そうすることがいずれどこかで自分をも救うかもしれないと育ってきた人たちなら、必然的に周りの人を思いやり、決して自分だけが優先されようなどとは思わない利他性の高い集団として成立するのだろう。これこそが、この地の人たちの災害レジリエンスを高める大きな要因になってはいるのではないかと考えるに至ったのである。

振り返ってみて

関西では今年、自然災害が集中し、直接大きな被害を受けていなくても、マスコミの報道や SNS からの情報に毎日続けて触れているだけで疲弊している人たちが大勢いる。こんな時だからこそ、現地の方々の知恵を教訓とし、地元の繋がりを見つめ直していきたいものである。

しかし今回の実習では、大震災時の状況を知るだけでほぼ日程が終わってしまうほどだった。自分が求めていた震災・復興時の調査にはまだまだ至らず、できれば次年度も参加させていただきたいと考えるようになった。そしてさらなる課題として、災害により原型をとどめないほど痛めつけられたとしても、その土地で生まれ育ったことを誇りに思えるよう支援する手立てと、提供する場を創造することへも関心が高まっている。

何より一年後にはなるが、出会った皆さんがどのように過ごされているのか、再開するのが今から楽しみなのだ。長年生きてきて、こんな想いになる出会いはほとんど経験のない、貴重なことだと言えるだろう。

今回お世話になった多賀城・石巻の皆様には心より御礼申し上げます。そしてこれからも皆様の叡智をご教授いただけるよう、よろしく願いいたします。